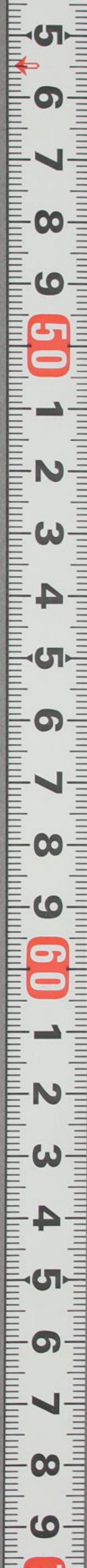




あつる州二篇

四二九  
366  
四二九

二



賣卜先生安樂傳授下之卷



○賣卜先生曰次は誰と云ふ順由は毎小是は也

○私に世東町小住居つゝまま香臭を何素傳てこり

ままをみおち秘傳合ふくゝる家傳を承りまゝにその

御守り名にのりまじりて或は如くはりて日る所はし

流し成今ふりも多しは仕直ぬれもてなれは

流し先も色ゆきませぬ是を母者も病み私を

捕く毎々失見彼女も切流ぬ娘を娶ふも御人

あゝ。おかしな事なぞも皆無事。又もさういふお徳女も  
お好おれ先程の御事。お入りの己の命に替  
て。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
だ。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
の。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
義理を。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
操。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
見責。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お

色。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
く。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
は。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
○。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
く。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
お。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
お。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
お。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
お。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お  
お。おのゝいふやうに。おれがなれぬ人。お









釋ありし中へ釋の浪ふため海までいそぎ遊女  
と申すもなほ女島にいらせ候らぬ遊女有るは  
いづれか

とて遊女にいひし言ひはなほ傳へたるは  
釋の由らめし時分物いふ今も是れいふ言面  
と海へ船かけしやとぬ遊女のまじりしは裸に

しと申すは世に多し物もなほ今もいふこと  
よと申すはつのはや者も長遠はたし海邊に  
遊女もなほ妍貌も年をいふと今盛なはる元日か

大海日ましく明らるる船高けしは月明なは  
十人とも浮鴻う都をいふと○とて  
道分初精もあせもなほ十人ともあはるは

手合いする術ありて日へ夜にわたりて  
一あぞ何となく教習するの秘事とあはるは

余もなほねと○浮鴻も止むるは  
是れ海を秘事ありて其秘事いふは

是れ海を秘事ありて其秘事いふは





女子の生活

女子の生活

七



Main body of handwritten text on the right page, including the word 'Amour' written in cursive.

Main body of handwritten text on the left page, including the word 'Amour' written in cursive.



Handwritten musical notation on the right page of a manuscript. The notation consists of a single melodic line with various rhythmic values and accidentals. The notes are written in a cursive, historical style. The page contains approximately 12 lines of music.

Handwritten musical notation on the left page of a manuscript. The notation consists of a single melodic line with various rhythmic values and accidentals. The notes are written in a cursive, historical style. The page contains approximately 12 lines of music.





此の御書は梅屋敷の御書に  
 打合せの御書に御書に  
 物ぬきとてあらはれと我の御書に  
 惚ぬく女帝の御書に御書に  
 果小し御書に御書に御書に  
 くまぬく御書に御書に御書に  
 為と自ら小御書に御書に御書に  
 とまはれ御書に御書に御書に

此の御書は梅屋敷の御書に  
 惚ぬく女帝の御書に御書に  
 果小し御書に御書に御書に  
 くまぬく御書に御書に御書に  
 為と自ら小御書に御書に御書に  
 とまはれ御書に御書に御書に  
 此の御書は梅屋敷の御書に  
 惚ぬく女帝の御書に御書に  
 果小し御書に御書に御書に  
 くまぬく御書に御書に御書に  
 為と自ら小御書に御書に御書に  
 とまはれ御書に御書に御書に





つゝ女の操ちふやあゝくを原切に大方あむせむ  
 まれも自女に涙を切もあつちあむあゝあむせむ  
 ちやんはあむせむ

◎ 翁の目もつゝあふせむあむせむあむせむ  
 いふ者もあむせむ傳はせむ鬼の像と振て朝をさる  
 ののあむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 途山後さうらうさうらうあむせむあむせむあむせむ  
 娘鬼あむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ

くもゆいあむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 池をふ成まゝあむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 えく我あむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 なるあむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 なる鬼あむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 けらあむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 地獄の口あむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ  
 汗あむせむあむせむあむせむあむせむあむせむ















せどんばもへんおふしへは賢知人へ  
皆自明ありて形よ行ひ且文字も筆あり  
終り誰の是をき信せしん余とあれふ異なり  
なまが由よりしるもと反して自回自答  
ふしがり作りぬ是偽ふ家が何やまらとあり  
くめん為ふよ知人の口は去似るりえより他  
弘びある福ぞ若る人あり余の云は

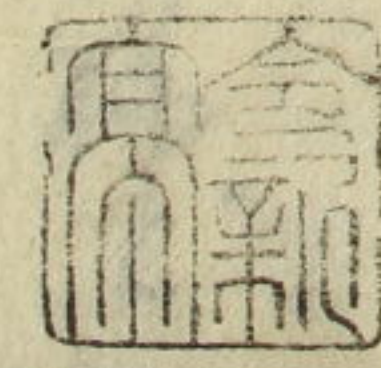
のひとかぬ罪をきし終いさの志  
そのて筆とくしり竹ののみ

文化十癸酉

湯月中也

今新亭

氏祐題







多き佛を多かりし

南無阿彌陀佛

けふはくく人歎と離れ他念なく

二六時中称名をかりふなる言信誠

等し事と云ふは商家れ者と賣買

乃為し称名は名と農人と耕作乃

きめし福名を言ふは所あるは

業種よりして称名を言ふは

像よりいひてす宗も信はる世

たすけ給くと他力を頼む者と佛前を

返すを己よりいふは乃欲するはゆるを

て他力宗を言ふは稱名も題目と

代カも観念も日用の行状と二つふりて

一ふる事阿彌陀佛の像へ名をい

たふ出家の業乃言似するは佛法と世

用と心二つなる二つなれをのりて

退轉たいてんいしする為ために事ことと為なりし人ひとを以もつて  
 先生せんせいの色彩しきしきより一度いちど固こ有あれ奉ほうんを  
 教しゆ明めいとてあしき事ことにあしきとたん  
 笑わらへうそを大おほ悪あくれ根ねを善ぜんきとより  
 よ夫おつとと性せいよ是こゝに謙けんを善ぜんきとより  
 體たい用よう一いつ致しちなりし人ひとは親おやへと孝かうを  
 有り主人しゆじんへの忠ちゆうなりし人ひとは弟ていを  
 一いつく夫婦ふうふを別べつとわけし和わとなりし人ひと

朋友ゆうゆうと約やくれたがなやに信しん切せつとして  
 下した人の憐あはれを加くわへることを孝かう子ことして  
 ぬやにして家か業ぎやうや財さいのす忍しのむ事こと  
 を其そのの賣うり先さき買かひ先さきへ新にいしきふれ不ふ実じつを  
 其そのの不ふ実じつをせめて備びはなりし人ひと  
 其そのの不ふ実じつをせめて備びはなりし人ひと  
 其そのの不ふ実じつをせめて備びはなりし人ひと  
 其そのの不ふ実じつをせめて備びはなりし人ひと

なりよあんるく一えを勸じとく  
家もろくしるものくく樂一まき  
世中よらん

同を報るくいしむも安心よまきれ  
まじ少一を儒をまきかへに益あり  
やいし

善なる不と安んを窮じふまかりも  
有まじさるく信家ありて念佛一倫よ

よ一の侍とつて一儒々ハ不偏と侍  
て大道なり

同偏と不偏との決水

善主親丈夫念佛まきひなるとひとす  
念佛を信ん一ニ六時中ハ中よ及ん  
多く乃日課を勤めんとす爾を家業乃  
姑とていひ終ん又忠存れはく人も世に  
よなるゆへ主親丈夫横種あしくなる

却て<sup>かこつ</sup> 初<sup>はつ</sup>を<sup>もと</sup>さ<sup>よ</sup>ぶ<sup>り</sup>家<sup>け</sup>業<sup>ごう</sup>も<sup>も</sup>疎<sup>そ</sup>く<sup>なり</sup>由<sup>よし</sup>に  
 後<sup>のち</sup>く<sup>た</sup>切<sup>き</sup>られ<sup>ぬ</sup>備<sup>べい</sup>け<sup>す</sup>々<sup>々</sup>出<sup>し</sup>家<sup>け</sup>を<sup>も</sup>遂<sup>すい</sup>  
 た<sup>た</sup>き<sup>に</sup>だ<sup>げ</sup>し<sup>て</sup>子<sup>こ</sup>な<sup>ん</sup>ん<sup>の</sup>れ<sup>を</sup>世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>と<sup>も</sup>  
 世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>の<sup>ち</sup>差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>と<sup>も</sup>法<sup>ぽう</sup>子<sup>し</sup>の<sup>ち</sup>儀<sup>ぎ</sup>家<sup>け</sup>上<sup>じやう</sup>  
 出<sup>し</sup>家<sup>け</sup>の<sup>ち</sup>儀<sup>ぎ</sup>に<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>に</sup>其<sup>その</sup>弊<sup>へい</sup>  
 と<sup>なり</sup>甚<sup>し</sup>し<sup>き</sup>よ<sup>う</sup>て<sup>は</sup>主<sup>しゆ</sup>親<sup>か</sup>を<sup>も</sup>す<sup>る</sup>  
 極<sup>ごく</sup>も<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>極<sup>ごく</sup>に<sup>ゆ</sup>り<sup>て</sup>主<sup>しゆ</sup>親<sup>か</sup>を<sup>も</sup>す<sup>る</sup>  
 者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>より<sup>も</sup>佛<sup>ぶつ</sup>各<sup>かく</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>が</sup>れ<sup>ば</sup>罪<sup>つみ</sup>人<sup>にん</sup>

も<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>一<sup>いつ</sup>に<sup>も</sup>支<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>一<sup>いつ</sup>に<sup>も</sup>  
 初<sup>はつ</sup>尚<sup>じやう</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>に

佛<sup>ぶつ</sup> 亦<sup>また</sup>の<sup>ち</sup>佛<sup>ぶつ</sup>か<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>一<sup>いつ</sup>に<sup>も</sup>  
 い<sup>い</sup>ふ<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>極<sup>ごく</sup>に<sup>ゆ</sup>り<sup>て</sup>主<sup>しゆ</sup>親<sup>か</sup>を<sup>も</sup>す<sup>る</sup>  
 心<sup>こころ</sup>な<sup>ん</sup>ん<sup>の</sup>れ<sup>を</sup>世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>と<sup>も</sup>  
 乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>一<sup>いつ</sup>に<sup>も</sup>支<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>一<sup>いつ</sup>に<sup>も</sup>  
 初<sup>はつ</sup>尚<sup>じやう</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>に

二をあげていとも先主親を佛に位ん  
 るるハ念佛をこそ題目めても何ふても  
 こそ宗旨をまゝい主親を佛に位んよかるよ  
 やに随ふ大切は勅じへ一これ又孝は  
 一徳なり又孝經の事おとく孝を徳乃  
 本よく人お徳の孝より大なるをなく  
 貴きもの也よも身體髪膚をともい  
 ちやう徳とあれも父母に遺傳の疵はけだ

孝は一徳なりよ上なる徳は孝にほりて  
 乱れは醜なりありてありては次儉を徳とま  
 やうた一用をさうして至孝れ身とおろハ  
 一徳なりよ何やうかドみつるも何やう  
 五貴をば身はとあれ次上は徳を万民と  
 安んどの口をひらきも口におやまら  
 なく徳の天下にそら徳をこそ徳みとほ  
 徳をこそ徳なりと徳なりと徳なりと徳なり



家内和合して天乃道を月以地乃利と  
 して水以謹しとど一也多知るるも  
 よく様より家くまをまてまの門子をか  
 牙以脩ひを以て本と一也一教を以て  
 まるるもを以て本と一也一教を以て  
 と一也一平生孝弟と一也一終めを  
 神明と通し一也一四時を以て一也一  
 東西南北  
 随氣と水と一也一閨門の入りて一也一  
 禮と一也一

治國平天下此理なりと一也一孝道れ亦  
 出と一也一義なりと一也一謀なりと一也一  
 也一也一へと一也一今我動じざる  
 也一也一  
 同念佛一也一修家也勸也  
 也一也一知んば一也一儒も現  
 世れも一也一未來れも一也一  
 傷も一也一今も一也一



らずやまは法華宗ハ浄経題目を  
 化念なく勸め是又今世とて修り  
 五福にたゞはつて八宗九宗ともま  
 宗者ありて今世とてはと免はれ極樂  
 往生して佛法に承りては善に  
 極樂ともてけき福と聞かど  
 けとていひてはなかりけり  
 けは儒にもあらずいひて悪に  
 けは儒にもあらずいひて悪に

ぞくしてあはれ世に居るは性も是くして是に  
 あらに親は孝行また忠義また貞順又備  
 の交りましく本心よきとひはひる死  
 て何れもいひなきやいする鬼にせむる也  
 朝も暮もせむく夕も死すも可なり又  
 生かきくはくかんそ死をまらんも  
 何れ佛法にも己れは唯心は淨  
 お我を即ん即佛とも説くあり又一体

和尚のまゝ

死しとせぬとせぬまゝまゝはゆはゆぬぬままははゆゆ

ききののねねハハすす那那そのそのいいををぬぬれれ

着き鬼おにああししととそのそのれれ情なさけかか那な海うみ深ふか

ままくくああ倫りんれれををままくく勤こゝろりり一いち切き地ち獄ごくく

ああののままししととままつつままはは是これままてて忠ちゆう信しん存ぞん子し

貞てい女にょれれ比ひ獄ごくへへああししととままつつままははままくく

ああへへままつつままはは一いち國くに東とうよりより道みち二にぬぬれれをを信しん

ままくく深ふかくく信しん心しんせせしし着きるる女にょ言ごん病びやうしし

んんままれれまましし一いち乃の枝えだまたまたままけけれれ

ごごららくく一いち切きりりままれれかかららままよよ

ととああるる一いち同どうおおらら一いち摘たひ芝えん覺かくのの原はら

石いし田でん白はく鳥てう西せい先せん生せいれれまま妙めう乃のままししととまま

てて法しやう人にんのの功かう所しよ得とくししるるああままくく同どうおおららまま

ままののまましし書かき得とくんんととすすままたた才さいみみくく



一あるまゝめて第一期をくぐめるちかき  
 火うごにあらざる人をきづくや身を滅ぼす  
 べんとすれを恥ぢるかや守城をもすく  
 乃びけしむぞか一命を人をもとめぬ  
 事ある事いふ火乃をむくより味方  
 のかれしむとむとむく老くく教へて  
 るき子思れ恩人の情捨かすを控さ  
 らんやとむくむくき病よりりて俄

親く存る忠朋友乃信くしをきんと思  
 ひまも力たよむくは悔乞よた  
 すくづくに苦み終えさなるかき  
 よあはれやまきくきにお余せし事と  
 よ後ひいんがむくさうしるは是れ  
 一即今ひいまくんまにすみむんを  
 費ひて生れ疑ひをさす安んを  
 一軽なりと忠存れを勧め

死ありがたしる有難ありがたき事ことありけり也  
 同どうちしるは備いそれ道みちはほと名な家業かぎれ障さや  
 りありけり佛ぶつを信しんじ念ねん佛ぶつやん  
 けり也  
 善ぜんむじり同どうちしるは倫りんはけり  
 けり家業かぎ子こ精せいと入い路ろは家旨かぢ子こ徳とくひ  
 める事こと、障さやらふかへり一ひとかたたどくは  
 けり也一ひとかたたどくは金銀きんぎん乃なり勘定かんぢやうの金

そと人そとびと算そろばん法ほうをとり次人たのをたのみ勘定かんぢやう  
 をとりゆりひられをとりと心得こころえて  
 そのとあり通とほ小帳ちやう合あひと係かゑり一ひとかたたどくは人ひと事こと  
 ありけり也  
 勘定かんぢやうのま算そろばん法ほうをとりと心得こころえてゆりよん基もとに  
 よひて定めごとし又算そろばん法ほう子こより一ひとかたたどくは  
 何なにれ外ちがより事ことありけり也  
 乃なり今いまする者もの自じ知ちするゆり其その毫こをれ算そろばんひ

ち一是の中人を發明せし人なり  
 兼法をぬ人を中人と云ふは生死を  
 一に來世いかんといひまづらんよなふ右  
 兼法をいふ者は禪宗の法をいふ  
 禪宗もたつとていひ念佛行者れ勤め  
 之圖ては是もよかんとていひ又あつ時を  
 忽防主の要人をいふは一念往生する  
 後世れと免は法後す成すても有つて

かり又兼の好むよふ法氣と云ふて朝礼  
 なくもりのあつふがれさいいふて兼法  
 持てハ驕りのみりな増長して終  
 修をつまやたに一禮の好むる事  
 ち一は又貪しきに苦しめる人をいふ  
 兼法をいふは兼法をいふは兼法  
 洋月年回ふれ大切なり兼法ハ却てむら  
 しくいふこと好む兼法湯をいふこと



ちやくしんハ大切せつせつにゆてわれわれ怪方かいほうをきく次  
 その外ほか秀しゆ清せい無むおおままくくておおねねとといいくく酒しゆ色しき  
 上うりりががれれ名な同どうととぬぬみみおおどどにに堪かん忍にんすすままをを  
 ちやくちやく家か情じやう甚しんしくしくままりりてて人ひとををつつんんとといい  
 子こ平へい類たぐひひ多たかかくく一一又またたたももななららぬぬをを金きん  
 銀ぎんととぬぬととかか一一とといいぬぬ集あつれれのの心こころををくくららめ  
 たくたくちちららとと怪かいままををししききらら限げん者しゃたたままるるちちど  
 びびききくくるるとといいふふままととくく吾われ輩はいののみみななをを使もち用よう也や

ちやくしんハ大切せつせつにゆてわれわれ怪方かいほうをきく次  
 その外ほか秀しゆ清せい無むおおままくくておおねねとといいくく酒しゆ色しき  
 上うりりががれれ名な同どうととぬぬみみおおどどにに堪かん忍にんすすままをを  
 ちやくちやく家か情じやう甚しんしくしくままりりてて人ひとををつつんんとといい  
 子こ平へい類たぐひひ多たかかくく一一又またたたももななららぬぬをを金きん  
 銀ぎんととぬぬととかか一一とといいぬぬ集あつれれのの心こころををくくららめ  
 たくたくちちららとと怪かいままををししききらら限げん者しゃたたままるるちちど  
 びびききくくるるとといいふふままととくく吾われ輩はいののみみななをを使もち用よう也や





なすにまんぼく奇怪するを信用  
 一公よ五斗ふるき事以ては松麿  
 あれ樂一みも身をおもよあるをき事  
 けりし種々極とんとを迷ひし何分  
 かぞふに違あし一是も道を知り  
 が有りたなり通し平んを愛明されむ  
 洒掃意封をけり忠存れ大しと云りて  
 見にすむんなり是もてれ過にあし

何し悟る事なれよき人そあしを遣次  
 小も顛沛中もあし事其人は現世未來  
 何事かかかきん一費れ玉妙なる大  
 ろるもこのも天子標しそ外るざり  
 何れもこれ者れはけりかひもきん  
 何れも藤沢先生れ之恩より一日  
 恍惚とて平んれしを得るに色事  
 ことほありし斯く速くはくはく



